

〈 ありがとうさん 〉

—映像の豊かさ 10年—

三十数年前、邑楽町に越して来るその年に、私は娘と映画を見た。小さな前橋の映画館。映像は、美しく深く人のありようを描く。表現された映像が消えても、心の奥底に映った映像は、あり続け離れない。何なのか。監督の譲れないその意志が、映画になったそのときに、どう見てもよいとでも言うように解き放たれた。一つの決められた方向ではない。そのやわらかさに心震えた。映画「伽椰子のために」。私の中の映画が変わった。

映像は、本来、豊かなものであったはず。目で見ることしかできないものを、別の形で見る事ができたのだから。そして何より素晴らしいことは、そこには監督の願いや強い意思がある。言語や音楽、人の生きた時空を伴って表現された優れた映画は、私たちが見失ってしまいそうな自然や生命の根源に立ち返ることとしても、子どもに届けられなければならない。いつもと違う映画を見れば、子どもは「感じる力 無限に拓く」。子どもたちを見ていてそう思う。映画を見ていてそう思う。

邑楽町が群馬県の映像教育の指定校になった翌年から、子ども大人町民で立ち上げた邑の映画会。世界中の優れた映画を見続けた。子どもの心に積もった映像は、生きていく節々で必ず思い出されるに違いない。多くの時間と、多くの人に関わるから、こんな素敵な映画会が今年も開かれる。子どものちょっと先を生きる大人が、生命をも脅かす負の足跡ばかりを残すようであってはならない。「おとなが見まもる こどものまなざし」これからも大切に、「信念は曲げない」。これでいい。

邑の映画会上映54作品。映画を見つけ、上映し、みんなで見た、10年。リュミエール博物館長フレモー氏からの「リュミエール最初の映画」上映権の返事は、一つ。『その情熱に、許諾する』。〈 ありがとうさん 〉 邑の映画会実行委員会 アーティスト・ディレクター 加藤一枝

みんなで祝おう

「邑の映画会」が今年で第十回を迎える。すばらしい。小学生だった子どもたちは高校生、大学生、社会人にもなっているわけだから、子どもたちが入れ替わっても、この映画会を続けていこうという気持ちが、子どもたちにも学校にも地域にも失われずに続いてきたということだから、すごい。

十年前と比べて、子どもたちの周辺には、より一層、無意味で騒がしい映像が洪水の如く溢れかえっている。フランスのド・ゴール政権下で「映画教育」と言うものがスタートした時、時の文化相、アンドレ・マルローは「子供たちを商業主義から守るため」とその目的をたった一言で語った。

映画館のない邑楽町だからこそ、出来ることがある。十周年にふさわしい、優れた映画が集まった。ビクトル・エリセ監督の「ミツバチのささやき」は必見です。「邑の映画会」が、どんな映画文化を共有しようとしているのか、とてもいいお手本かと思います。

邑の映画会顧問 映画監督 小栗康平



「小栗監督と映画のこと
いっぱい話したよ」



第10回邑の映画会に寄せて

第10回邑の映画会の開催、おめでとうございます。

映画館もホールもない邑楽町で10年もの長きにわたり、全国的にも注目を集める映画会が毎年開かれていることは、私にとって驚きでもあり喜びでもあります。この間の実行委員の皆さんのご努力と、小学校の体育館に足を運んでくださる観客の皆さんにも、感謝の気持ちでいっぱいです。また、この10年間、顧問としてこの町の人々の取り組みを温かく見守り、支えてきてくださった世界的な映画監督、小栗康平さんにも深く感謝の念を捧げたいと思います。

現代の社会は、映像で満ちあふれています。しかし、洪水のような映像情報の中で、ただ受け身でいたのでは、その洪水に押し流されてしまいます。子ども達が、映像を見る目、受け取る感性、取捨選択できる能力をしっかりと獲得しながら、次の時代を作り出していく主人公となっていくためにも、映像教育の役割、邑の映画会の皆さんの役割がますます重要となっています。

邑の映画会は、この3年間、「協働のまちづくり事業」として、町民と行政の共催で取り組まれてきました。この事業は本年度でいったん区切りとなりますが、今後もその精神をしっかりと引き継ぎ、皆さんと協力しながら「文化のまちづくり」を進めていきたいと思っています。

来年9月には、皆さん待望の中央公民館がオープンします。恵まれた音響や客席、安定した空調の中で落ち着いて映画が鑑賞できる条件が、ようやく整備されることとなります。第11回の邑の映画会は、その中央公民館で行われるさまざまな映画会の中核として、ますます存在感を高めてくれることでしょう。本日の映画会が、お集まりの全ての皆さんにとってよい思い出となるよう、また心の中に豊かな感性の種となって残ってくれるよう期待を込めて、10周年へのお祝いの言葉とします。

邑楽町長 金子 正一

いい映画は…

子どもの豊かな感性を育てる

「邑の映画会」も今年で10回目となった。関係者に心から拍手を贈りたい。この映画会の素晴らしさは、

- ① 取り上げる作品が傑作ばかりということ。価値の高い映画をよくぞここまで揃えたのだと毎年思う。
- ② 準備・運営はすべて子どもと大人が一体となって実行委員が行うこと。スクリーンを立て、みんなの力で体育館を居心地のよい映画館にしてしまう。
- ③ 小さな町の「邑の映画会」の顧問が何と世界的な小栗康平監督であり、毎回講演をさせていただいている。今回の演題は「語れないことの豊かさ、語れないことの深さ」。小栗監督の世界を感じ、ワクワクしてくる。
- ④ この映画会をここまでリードしてこられた、実行委員会会長の加藤一枝さんの存在もはかり知れない。「おとなが見まもる こどものまなざし」をテーマに、いい映画を届けることで、自らの感性を育ててほしいと熱い熱い思いで取り組んでこられた。彼女がおられなかったら「邑の映画会」は存在しなかったと思う。加藤さんの映画へのこだわりの10年、実行委員みんなが応援・協力したい気持ちに駆られてここまでできたのだ。

振り返ると、私が長柄小学校長の時、邑楽町の中野東小が映像教育の指定校になった。ある日、加藤さんが、子どもたちに映画を見せたいと「霧の中のハリネズミ」（ロシア/監督：ユーリ・ノルシュテイン）を2、3年生に上映してくださった。見終わった後感想が言いたくてみんなが、素晴らしい思いを述べていた。いい映画を見るとこんなにも心が動くのだと改めて、本物・よいものに触れることは豊かな心が育むと実感した。

邑の映画会の関係者の皆さん、ありがとう！！心から感謝申し上げます。

邑楽町教育委員会教育長 大竹 喜代子

何とか3日には

いつもお世話になっております。いつもながら、上映会のご準備、ご苦労さまでした。邑の映画会と東京国立近代美術館フィルムセンターとのお付き合いは、第3回「アリチャン」「ポロンギター」「ありがたうさん」のころからですね。

実は、先々週の金曜日（13日）に、数十年ぶりで激しい腰痛に襲われ、数日間は寝たきり安静。その後も、寝起きや椅子からの立ち上がりがかきつく、メールを書くことすらままならない毎日でした。アメリカンフットボールをやっていた高校生の頃に痛めてから、腰痛とは40年来の付き合いで、30代の半ばには手術までしているのですが、最近の不用心にまたまた祟られた思いです。

そんなわけで、まだ身体的に腰を落ち着けて文章を書くのがためられるのと、なんとか3日のそちらの上映会まで足を運べるよう、しっかりと回復させたいので、これに免じて、今回はご容赦いただけますでしょうか。申し訳ありません。どうぞよろしく願いいたします。

東京国立近代美術館フィルムセンター主幹
とちぎ あきら

会場は、子どもが走り回る

邑楽町立中野小学校体育館



世界中を探しても

邑の映画会 10周年おめでとうございます。この映画会の最大の特徴はフィルムで上映するというこだわりです。しかしそれと同時に驚くことは素晴らしく吟味され選択された上映作品のこだわりです。これほど毎回素晴らしい作品を子供と大人が一緒になって鑑賞できる会は、日本中いや世界中を探してもなかなか見つからないでしょう。宝物のフィルムを映写機が回し続けられる限りこれから先もずっとずっとこの会が続きますように。

川本喜八郎・岡本忠成監督アニメーション作品撮影者
田村 実

益々おめでとう

ご無沙汰しております。

小栗監督の「FOUJITA」公開年の第8回邑の映画会実施の折、NHK前橋局から取材にお邪魔いたしました。映像・学習・催し実施・そして日常を通じ、しっかりと感受し思考することに取り組みされてきた皆さんの、ご活躍や思いに接し、大変貴重な機会でした。皆さんのご協力賜り、事前取材も現場撮影もオンエアも、たいへん思い出深い企画とさせていただきます。今年は10回目ということで、益々おめでとうございます。

アニメーションに加え、ビクトル・エリセ監督「ミツバチのささやき」上映と、小栗監督講演「語れないことの豊かさ、語れないことの深さ」。折しも！スペインはカタロニア独立で揺れるこの時期、とりわけ興味深いです。出張などない限りぜひ伺いたいところ、ご準備や研究順調に進まれますようお祈りします。ボチボチ成人なされたメンバーもおいででしょう、皆さんお元気だと良いな。

パワフルでエナジェティックな加藤さんも、どうぞお疲れ出ませんように！

NHK放送センター制作局ディレクター久保田ななこ

10年の収穫

子ども・大人スタッフ

*** 子どもスタッフ ***

- ☆「えいがをみられてうれしいです。またみたいです。とくに今日の「鬼がくれ山のソバの花」がおもしろかったです。」(ゆうと)
- ☆「はなおいをみて あたまがとれて からだがうごいたところが おもしろかったです。」(さきな)
- ☆「準備などを通していろいろな人と協力して進めることで協力することの大切さを学べました。いろいろな人が参加してやっと一つの映画会が出来ているのでとてもすごいと思いました。第10回をきちんとむかえられることがとてもうれしく、来年以降もぜひ楽しく参加したいです。」(瑞萌)
- ☆「映画会を通して、いろんな優しい人たちと出会って、その人たちと協力して映画会をできたことを嬉しく思っています。スタッフやお客さんもみんな優しい人ばかりで、楽しく映画会の準備などできてよかったです。第10回を迎えられるのが、すごいと思うし、私も嬉しいです。15年、20年…と続けられて、毎年、映画会に関われるようにしたいです。いろんな年代の人が幅広くいて今もとても楽しくできています。ずっと参加したいです。」(光夏)
- ☆「私は、スタッフの仕事をするようになって、人のためにする仕事が、こんなに楽しいことなんだと改めて感じました。私は今、初めて会った人でも、困っていたら進んで助けるようにしています。今までは、人見知りや激しく、助けるなんてことはできませんでした。でも、このスタッフの仕事をしてから、人と接することが多くなり、できるだけ多くの人と、良い関係を築きたいと思うことができました。こんなに私を変えてくれた邑の映画会の方々に感謝です！！」(梓)
- ☆「映画のおこりや世界で最初の映写機のことを知るこ

とができたこと、子どもから大人まで幅広い世代の方々と一緒に協力して会を運営できたこと、「映像を見る」ことを意識して問い直すことで自分らしさやその人らしさが認め合えることなど、多くの発見があった。会を運営、成功させるに当たって、スタッフ同士のコミュニケーションが必要不可欠である。スタッフのコミュニケーションで映画会はよりよいものとなり、その中で人と人がつながり、責任感、コミュニケーション力などが今後も身につくのではないのでしょうか。」(和紀)

- ☆「みなさんにとって映画はどんなものですか？感想を誰かと共有するためのもの、現実では起きないようなことが実現出来てしまうもの、自分が知らないことを教えてくれるもの。感じ方も人それぞれですから、たくさんの例があると思います。私は今まで邑の映画会を通してたくさんの映画に触れてきました。最初は私も映画を見て、おもしろいかそうでないか、ただそれだけしか考えていませんでした。しかし、たくさんの映画を見るうちに、映画は「伝えたい」という気持ちの塊だと感じるようになりました。日常の小さな幸せや失敗、人間の温かさや非情さ、平和の素晴らしさや戦争の悲惨さ、など、様々なことがワンシーンからひしひしと伝わってくるように感じるのです。つくった人の「これを伝えたい」という気持ちを感じると、映画を見て涙を流したり、怒ったり、笑ったり、温かい気持ちになったりします。これから出会う映画からも、作者が何を伝えたいと思っているのか、少しでも感じ考えていただけたら大変うれしく思います。」(早希)

*** 子どもスタッフ が 大人スタッフに ***

- ☆「今回で映画会十回目。映画館の無い邑楽町でこのようなイベントを行っているこの町を、私はとても誇りとして感じています。」(戸叶)

- ☆「映画を見ることの楽しさを実感したり、初めて得た感情があったりしました。それ以上に、自分たちで意見を出して用意をした映画会で、喜んでくれる人がいる事が本当に嬉しいことなのだと思った。自分たちがした事で喜んでくれる人がいる、この喜びを知ったからこそ、やっぱり私は人と関わる仕事がしたい！と決めることができました。」(茂木紗希)
- ☆「10年前に始まり、当時は映画会が知られていませんでしたが、現在ではたくさんの方々を知っていただけようになりました。その結果、地元の方やその他地域の方々に映画会の魅力を伝えるには時間や色々な人の支えが必要という事がどんなに大切なのか知った事が収穫したものです。」(茂木彩夏)
- ☆「私はもう6年、この会に携わっている。収穫と言ったらやはり「幅広い年齢層の人とのコミュニケーション」だろう。スタッフは10代から70代までの年齢層で構成されている。これほど幅広い年齢層の人と関わることは、この映画会に参加していなければできないし、他の活動でそのチャンスは少ない。映画に関することだけでコミュニケーションをとるわけではない。これまでの人生経験や生活の知恵、自らの持つ思想などたくさんのスタッフがたくさん話してコミュニケーションをとる。私も自分の考えを話す。皆に内容をわかってもらえるように工夫して話すことで会話力、コミュニケーション力、話を聞く能力を得ることができる。このコミュニケーションの中で毎年の映画も決めている。邑の映画会では、とにかく映画を観ることに重点を置いているように見えるが、それと同じくらいコミュニケーションを取らないと成り立たない会でもあるのだ。」(小林)
- ☆「小学生の頃から世界の映画を観てきました。現在の映画館でみるような作品とは異なるところが多くて、いつもワクワクした気持ちで観ることができます。昔

の映画は、白黒だったり、音やセリフが無かったり、音楽しか流れなかったりと、観る人それぞれが想像力を養えるような、素敵な作品ばかりだなと思います。特に、音がない作品には作者にしか正解は分からなくて、観る側にとってはまるで分かりません。自分なりの考えをたくさんの人と共有し意見交換することで、自分が気付けなかった作品の素晴らしさを見つけられることもまた1つの魅力です。私は映画を通して、たくさんの方と繋がることができ、また、たくさんの魅力を知ることでもできました。子どもスタッフとして今でも参加をしていますが、初めて参加した時からもう10年くらい経っていて、今ではとても懐かしいです。忙しくて参加できる時間が減ってしまいましたが、これからもスタッフとして活躍し、たくさん子どもたちに映画の魅力を伝えていきたいです。」(橋本)

*** 大人スタッフ ***

☆「たくさんの映画との出会い、映画会をつくる仲間との出会い、映画を見る人たちとの出会い、その場がつくりだす空気感、この10年で日に日に喜びを見いだす力が高まる自分を感じます。幸せな日々を裏で支える人や事物の存在を感じることができるようになったのでしょうか。目に映る世界の奥にある世界をも見ようとしてきたからだと思います。映像を学ぶ場、みることを見つめ直す場、問い直す場、また10年先もみんなです。」(高橋)

☆「全国的に見ても貴重なプログラムの映画会。4回目からスタッフとして関わらせて頂いていますが、一番の収穫は世界の素晴らしい映画をたくさん知る事が出来た事です。そして、この映画会を通じて、色々な人と色々な映画について話せるようになった事も良かったです。自分がアートアニメを知ったのは、中学生の頃。当時は情報も不足していて、なかなか見る機会にも、話す機会にも恵まれなかったのですが、まさ

か自分の町でこんな映画会が毎年開催されるとは思ってもみなかったです。これが続いている事は素晴らしい事です。」(永本)

☆「素晴らしい小栗監督に出会えただけでなく、世界的にも有名な作品を鑑賞させてもらえたり、講演も聞かせてもらえたり、大好きな監督の全ての作品も手に入れることができましたし、普段会うことのない立派な住民の方々と同じ目的に向かって仲良く活動できたことは大切な財産です。孫も最初の頃は小さくてお手伝いするにも子どもスタッフのお姉さんに面倒をみてもらいながらの活動でしたが、今年で小学生。映画好きになり、いろいろな所に映画を観に行きたくてしょうがないほどです。」(諏訪)

☆「子どもたちのために何か良いこと始めるようだから手伝おうという軽い気持ちからのスタート。そんな私でしたが、年々成長していく子どもたちとその感受性に感動。そして、縁の下の力持ちとして力を貸してくれる友人たちに感謝。私の感性は一向に磨かれないけれど、映画は何回見ても何かしら新しい発見があり心を揺さぶってくれる。これからもたくさんの映画と出会っていききたい。もっともっと多くの子どもに見てほしいと願う。」(中谷)

☆「映画好きだったので、10年前に『邑の映画会』のことを知って、少し離れた足利から会場を訪れました。そして小栗康平監督の『泥の河』を見て、講演も聴けて大感激でした。また、それと同じほどに感銘を受けたのが、会場で元気に活躍している子どもたちと、年配の方たちが映画を楽しんでおられる様子でした。そうしたことに感動して、足利にも映画会のことを知らせています。」(須藤)

☆「毎年子どもスタッフのパワーに背中を押されとうとう10年間歩んできました。走馬灯のように廻るいろいろな想い、幼かった子どもスタッフも今年成人式を

迎えた仲間がいます。益々スタッフが頼みしくなると同時に我が身の老いを感じるこの頃ですが、これからも日本の、いや世界の素晴らしい映画に出会えるのを楽しみに回を重ねていきたいと思っています。」(安富)

☆「自分ひとりでは見ようと思わなかった映画を邑の映画会で見たことで「映画も食わず嫌いはもったいない!」と思い知らされました。つまみ食い感覚でとりあえず見てみるのが、しあわせへの近道ですね!」(藤井)

☆「邑の映画会に参加して自分が見たことのない映画を見ることができ、多くの方と協力して、楽しい時間を過ごすことができました。邑の映画会最高です!!」(木村)

☆「こんなに多くの美しい映画と、私が出会うことになろうとは思いませんでした。なんだか気になる映像が、何度も仲間と見るうちに、鮮やかな深まりを見せる。小栗監督の話はその水先案内人の役割を果たしてくれた。多くの映画を見て、また気になる映画に立ち戻ると、今までと異なる美しさ新しい世界を秘めて立ち現れる。私の人生が好奇心によって面白いものになったように、映画が私の中でも深まりを見せる。」(川島)

赤ちゃんが寝転んでも 子どもが寝転んでも みんなで映画を見ている





映像のおもちゃを
見ているよ



大きなスクリーンと手作りの会場で、いつも見ている映画や
画像とちょっと違う、素敵な映画をみんなで見よう。

子どもスタッフ 川島若葉 森越梓 浅海のどか 山口真鼓
吉永早希 浅見陽花 齊田悠花 齋田千尋 高山瑞萌 西川
凌史 西川侑作 錦織真瑛 茂木紗希 茂木彩夏 戸唯唯人
小林黎士 樽井道予 樽井優介 樽井はるの 吉永和起 橋本
珠莉 金木美音 安富綾乃 梅沢光夏 梅沢幸生 梅沢典人
辻嵩斗 佐藤 光香 佐藤慧汰 佐藤諒汰 高橋優仁 高橋
咲希和 高橋実千花

大人スタッフ 新井幸子 新井正一 糸井徹 遠藤牧子 大川
玉枝 大久保純夫 大塚初代 大島聡 岡田悦代 小熊良雄
小倉章利 加藤あや 加藤一枝 上遠野良一 川島功 木村
信洋 栗原知子 紺野尋子 坂本順子 坂本文江 櫻井ちあき
塩井早苗 島田えり子 須藤のり子 諏訪百合子 関谷京子
高橋正明 竹内威夫 竹内美斗利 田部井三枝子 田村実
対比地知子 富田豊子 中繁キミ子 中谷和子 永本浩之
長谷川カツ江 長谷川玲子 濱田光恵 廣越恭子 藤井雅路
降旗りの 松井ひろか 宮城英子 茂木一夫 森和男 森田
義雄 安富光子 安富耕二 **顧問** 映画監督 小栗 康平

邑の映画会実行委員会は、群馬県の「映像教育」
を継続・発展させ、すぐれた映画作品の上映、およ
び、顧問小栗康平監督の講演を通して、豊かな感
性を育み、映像を学ぶための活動を行うことを目的
とします。



平成29年度 邑楽町「協働のまちづくり事業」

＜主催＞邑の映画会実行委員会・邑楽町教育委員会

＜協力＞東京国立近代美術館フィルムセンター

(有) ギャラリーヌン

(株) 学研教育アイ・シー・ティー

(有) 川本プロダクション

(株) エコー社

(株) 群馬 AV センター (株) プリズム

＜協賛＞ 館林西ロータリークラブ

朝日印刷工業株式会社 高源寺 恩林寺 大信寺

加藤医院

＜邑の映画会組織＞

主催/邑の映画会実行委員会 邑楽町教育委員会

・子どもスタッフ・大人スタッフ・邑の映画会会員

・ぐんま映像教育研究会

＜邑の映画会・群馬県の映像教育のことをもっと知りたい方は＞

・小栗康平オフィシャルサイト OGURI.info

www.oguri.info

・邑の映画会HP

<http://kenokuni.jp/muracinema/>

・邑の映画会実行委員のページ

http://blog.livedoor.jp/mura_cinema/

・ぐんま映像教育研究会HP

http://www.karayan.info/~edu_eizo/

このマークは、中国・チベットの少数
民族「ナシ族」に伝わる象形文字
【Dongba:トンパ】から「あかりを消し
て」の意味があります。



ずっとずっとと伝えたいもの
邑でみた風景
邑でみた映画



MuRA
cinema association

邑の映画会 かわるばん Vol.10